

## タスマニア州政府、環境 NGO、製紙会社の3者会談（議事録）

1. 開催日時： 2008年5月19日（月） 9時30分～12時40分
2. 開催場所： オーストラリア大使館 会議室
3. 出席者： タスマニア州政府  
インフラ・エネルギー・資源省 事務次官 Mark Addis  
インフラ・エネルギー・資源省 エグゼクティブ・ディレクター Kim Creak  
  
オーストラリア大使館 公使・参事官（農務担当）Bill Withers  
調査官（農務担当） 中村智子  
  
レインフォレスト・アクション・ネットワーク（RAN） 日本代表 川上 豊幸  
本部スタッフ Jennifer Krill  
通訳 Tom Eskildsen  
  
日本消費者連盟 副代表運営委員 山浦 康明  
  
ナマケモノ倶楽部 林 直樹  
副代表 Anja Light  
事務局 馬場 直子  
  
王子製紙 資源戦略本部 林材部長 河辺 安曇  
資源戦略本部 上席主幹 田辺 芳克  
総務部広報室 マネジャー 白本 繁治  
  
日本製紙 原材料本部 林材部長代理 松本 哲生  
日本製紙グループ本社 CSR 室 技術調査役 伊藤 浩己  
日本製紙 総務部 広報室長代理 藤田 美穂  
  
（オブザーバー）  
地球・人間環境フォーラム 企画調査部 調査役主任研究員 坂本 有希  
  
PEFC アジアプロモーションズ 事務局長・マネージャー 武内 晴義  
アシスタント 堀尾 牧子
4. 主な議事： 「保護価値の高い森林」「原生林」といったキーワードについて、関係者の間で共通の定義が定められていないことがあらためて浮き彫りになった。  
今後も継続して、3者による対話の機会を持つことを確認した。

(主なやりとり / 敬称略)

Bill Withers 本日は皆様にお集まりいただき感謝する。ただ、ウィルダネス・ソサエティーのアレック・マー氏が来日されるから、というお話だったはずだが、本日は出席されなくて残念である。しかし、豪州政府・タスマニア州政府、環境 NGO、日本の製紙メーカーという3者会談の機会を持てたことは嬉しい。環境 NGO 側から製紙メーカーに対して会談を申し入れたと聞いているので、議事進行は、製紙メーカーにお任せすることを提案したい。

山浦 日本製紙、王子製紙に対しずっと申し入れてきたが、今回、タスマニア州政府および大使館の同席の上で、ということでしょうか実現した。我々は事前に質問を用意してきたので、私が進行役をやりたいと思う。

松本 もともと、3 団体連名による 4/1 付のレターにおいて、アレック・マー氏が来日するので意見交換会を持ちたいとのことだった。それ以前には、一昨年 8 月ごろから、我々がニュートラルな判断をするためにも、環境 NGO だけでなく、豪州でタスマニア森林管理・施業に直接携わっている政府関係者を交えて意見を聞きたい、と申し上げてきた経緯がある。今回、我々が豪州大使館にお願いして会談が実現したこともあり、進行は任せてほしい。

山浦 それではお願いします。最初にタスマニアの森林で何が起きているか、8 分間ほどのビデオを上映したい。続いて、我々がそれぞれの活動を含めた自己紹介をさせていただきたい。

松本 最初に確認したい。議事は公開するのか、それとも非公開とするのか。

山浦 公開したい。双方で確認した方が良ければ、そのようにする。

松本 それでは、この場にいない人たちにも正しく理解してほしいので、3 者で合意したものを公開することとする。

Bill Withers 記録は誰が取るか。

山浦 双方で。

Anja Light 主な結論だけでもよい。

Mark Addis 双方が録音は行わないことをお願いしたい。

川上 意見に違いがあるからこそ(録音して)残しておく必要があると思う。以前のエバン・ローリーとのミーティングでは、エバン・ローリーは(録音することを)構わないと言った。

Mark Addis 最後になるまで、録音していることに気付かなかった。いちばんフェアなやり方は、お互いに録音しない、双方が確認したもののみを公開する、ということである。

松本 議論のポイントを明確にしながらか進めていけば、(録音しなくても)問題ないはず。

山浦 カメラの撮影はよいか。

Bill Withers この部屋の中だけなら構わない。

<<DVD 上映>>

山浦 日本消費者連盟は、食べ物から原子力に至るまで幅広く関心を持って活動している。タスマニアの森林伐採問題についても、日本の消費者は、タスマニアの森林チップから作られた紙をたくさん使っているのだから、原料について知らなければいけないということで、関心を持っている。

昨年、9月6-7日でタスマニアへ行き、森林伐採状況と現地における問題を確認してきた。立派な森林、特にオールドグロスの中でもキングユーカリと呼ばれる木が伐採されてチップになっている、という話を聞き、驚いた。ウィルダネス・ソサエティーと一緒にスティックス・バレー、フロレンティン・バレーにも行った。豪州の人々が自然保護に取り組み、世界遺産地域を広げようと努力している姿に感銘を受けた。豪州政府も一生懸命やってはいるが、AFS には問題点があると教えられた。市民団体は AFS の制度創設に実質的に関われなかったとも聞いた。日本製紙も、王子製紙も、チップ調達に関する情報公開を進めてほしいと思う。

Anja Light このような場を設けていただき感謝する。歴史的に意味のある 1 歩であると思う。ナマケモノ倶楽部は 10 年前に日本で創設され、持続可能なライフスタイルを追求している。キャンドルナイト・キャンペーン、ハミングバード・キャンペーンなど、ご存知の方もいるのではないだろうか。

我々は、ライフスタイルの変革を動機づけていくことを目指している。誰だって、原生林で作った紙で鼻をかみたいと思う人はいない。先月タスマニアを訪ねたが、自分が実際に見てきた木が伐採されるというのが現実であり、技術論だけでは不足である。1 人の豪州人として、他の 85% の人々同様に、オールドグロス伐採をやめてほしい。

日本の製紙メーカーは、この会談に参加してくれることで、誠意を示してくれた。調達元に対しても関わっていこうという姿勢である。このことは、オールドグロスの紙で鼻をかまなくて済むような社会実現につながるのではないかと期待する。

馬場 今年 2 月に RAN と一緒にエコツアーを実施し、10 数人の市民が参加した。太古の森に感動する一方で、それがどんどん伐られて日本で紙になっている事実を知り、何も知らずに生活していたことにショックを受けていた。

今日議論されると思うが、生物多様性が重要である。世界遺産に隣接するエリアが伐採され

ている事実は、まったく影響を及ぼさないとは言えないのではないか。地球市民として、企業にも、森を守り、森を作っていくことが求められている。

林 ナマケモノ倶楽部は持続可能な社会を将来にわたって作っていくために活動している。これからは、企業、NGO、消費者のコラボレーションが必要である。こういう会合を持てたことは非常に嬉しい。これからも対立ではなく協調を探っていきたい。2010年のISO26000について、我々は、異なるステークホルダー、すなわち、企業、NGO、消費者のエンゲージメントとして捉えている。日本国内においても、消費者庁設立をにらんで、内閣府主催によるマルチステークホルダーを招集した円卓会議が行われるといった動きがある。

Jennifer Krill アレック・マーが来られなかったのは、もともと、ウィルダネス・ソサエティーが団体として訴訟中であること、そして彼自身もまた訴訟中であるという背景がある。彼はこれまでも製紙会社の人たちと会ってきたので、今回も会いたいと思っていた。しかし、豪州政府のいないところで会いたかった。

川上 RAN はサンフランシスコに本部がある。もともとタスマニアの森林問題には関心を持っていたが、2004年末にガンズ社がアレック・マーを訴えた。この事実は言論抑圧として問題があると思われ、タスマニアの森林問題に取り組み始めた。

今回はこうして会議を持てて嬉しい。製紙会社にはお礼を言いたい。日本製紙も王子製紙も、原生林チップを買わないと表明している点については、我々は高く評価している。また、2004年3月、アレック・マーの来日後だったと思うが、日本製紙が、ガンズ社とタスマニア州政府に対し手紙を出しているが、このことも高く評価している。ところが、その後、「タスマニア州内できちっと議論してほしい」としたにもかかわらず、ガンズ社は訴訟という形で対応した。このことは残念である。製紙会社からは、サプライチェーンマネジメントの観点から詳しい話を聞きたい。

Jennifer Krill アレック・マーは来られなかったけれど、ウィルダネス・ソサエティーの作成したDVDを持ってきた。このDVDでは、2004年現在で、1日でサッカー場44個分に相当する面積が破壊されている。皆伐の速度は世界で最高レベル。タスマニアでは、伐採木材の90%以上はチップになり、豪州の他地域の2倍程度の木材チップ輸出を行っている。また、皆伐跡地で動物たちが苗(木の芽)を食べないように毒殺するのに1080が使われている。現在、皆伐面積の縮小など、いくらかの改善は生じている。しかし、未だそれは非持続可能なほど高いものである。国有林や州有林では1080はもはや使われなくなったが、ガンズ社が管理する私有林においては、まだ使われている。

Anja Light 森林はCO2吸収源としても大事な機能を果たしている。大きなキャンペーンが豪州国内で起きている。実際に森林破壊を止められるのは消費者である。しかし、豪州の人々だけが生活を変えてもどうにもならない。

松本 日本消費者連盟からいただいた手紙の中には、AFSの設立においては、当初市民団体が参

加していたが形式的であった、とある。この辺りの経緯を聞きたい。

Kim Creak AFS の設立には、タスマニア州政府と Forestry Tasmania は直接関与していない。AFS は、認証機関の要求に従い、豪州基準協会が認める内容、ガイドラインに従っている。また、PEFC のスタンダードに基づき、世界のどの基準よりも厳しい制度である。私はオブザーバーとしてのみ設立に関与してきており、AFS を支援するのが私の役目であると思っている。私は、世界のいろいろな森林を見てきた。NGO が AFS に問題があると言っているが、それは科学的根拠に基づいて話し合う必要がある。私自身の紹介をすると、科学者であり、フォレスターとして 30 年以上の経験を持つ。木を育てることはもとより、パルプ・製材など民間でも働いてきた。また、世界の森林という点では、タスマニアの世界遺産諮問委員会の委員でもある。環境保護と産業のバランスを取ることが大事だと思っている。

Bill Withers 補足させていただく。AFS 設立プロセスにウィルダネス・ソサエティーが十分関与できなかったとする点だが、すべてを受け入れられなかったからと言って、AFS に問題があるとは思わない。森林を合法的に持続可能な方法でいかにバランスを取って利用していくか。重要なのは、豪州コミュニティ全体が利益を得ることができる、ということである。

山浦 保護地域の指定、オールドグロスの定義について、ステークホルダーの意見を最後まで反映したのか。私が行ったのは世界遺産の縁だが、保護地域に含まれていなかった。ウィルダネス・ソサエティーが満足していない理由は、ここにある。

Kim Creak オールドグロスの定義については意見の違いがあり、相当議論が行われた。豪州連邦政府もタスマニア州政府も、そして業界も関わっておらず、専門委員会が科学的根拠に基づいて決めたもの。ガンズ社はまったく考慮されていない。科学者・専門家による決定内容によって、タスマニアの47%の森林、100万haのオールドグロスが保護されている。どこまで保護されるべきかについては、持続可能性を考えたバランスが大事。今後も常に学び続けていきたい。我々の場合、実際に調査しているのは科学者である。一方で、ウィルダネス・ソサエティーによる調査は十分な資金がない。関係者を関与させることは非常に重要だと考えるが、本日拝見した映像のような、間違っただけの内容のDVDやビデオは適切でない。話題に出た世界遺産の境界線については、世界遺産法のルールに則り、バッファゾーンが決められている。世界遺産地域調査委員会でも、先住民も含めて、すべての関係者と意見交換をしたいという意見があり、その問題は理解されており、見直しも行ってきている。

山浦 日本でもそうだが、意見交換会を行っても決定に関わっているかどうか。専門家は中立性が保証されているのか。スティックス・バレーでは、世界遺産に近いバッファゾーンの中で伐採が行われているが、果たして NGO の意見をフレキシブルに取り入れているのか。

また、日本製紙も王子製紙も、森林認証があるから大丈夫ということではなく、現地を確認して判断してほしい。

松本 AFS の設立プロセスはもとより、RFA、TCFA についても、どのような背景で成立したのか、現地駐在員も置いており、理解しているつもりである。また、現場は当然見ている。まったくわからずに買っているわけではない。我々もフォレスターであり、タスマニアで何が起きているか理解しており、その上でさらに AFS を取得しているのである。AFS は PEFC と相互承認されており、英国の政府調達方針立案に際して中心的な役割をした CPET からも評価されている。これらを総合的に考慮した上で、持続可能であると考えている。

川上 AFS は「科学者が決めました」とのことだが、AFS の基準はテクニカル・リファレンス・コミッティで決定されたもので、もともと WWF、ネイティブ・フォレスト・ネットワークの 2 つの団体が入っていたものの、他は業界の方々ばかりだったと聞いている。2001 年 10 月ごろ、問題があると主張したが、できあがってしまったので「もう変えられない」ということで、どんどん走ってしまった。今度の改定にも、環境 NGO の席は 2 つあるが、空いたままになっている。残念なことに、オールドグロスの伐採、HCVF の伐採といった問題のほか、Conversion(土地転換)も 40ha 以下に規制されるようになったとは言え、一応可能である。

松本 NGO からのパブリックコメントがまったく反映されていないとは思っていない。Conversion は行われなくなったし、1080 も州有林では使用されなくなった。タスマニアでは林業で生活している人が多くいる。すぐに変えることは難しい。NGO の意見を聞きながら、バランスを考えて良い方向へ動いていると確信している。

川上 Too little Too late だが、その辺りは、RAN も評価している。  
RAN が入手している情報や日本製紙、王子製紙の顧客企業などからのヒアリングなどから、両社ともに『原生林を使っていない、買わない』と主張していると理解している。どのように実施しているのか？「原生林は買わない」という両社の方針は、AFS では守れない。

松本 原生林を買わないと主張したことはない。保護価値の高い原生林は買っていないと説明している。

川上 保護価値の低い原生林は切っているということか？

松本 経済林として認められたものは使う。当社が使わないのは「保護価値の高い」原生林。ある程度極限(極相: climax)まで達したものをオールドグロス、そこまで達していないものを 2 次林として区別している。

Kim Creak 非常に重要なのは、バランスが必要であるということ。ISO14001 維持の上からも、州・連邦レベルでの規制を遵守する上でも、伐採は、当然伐採地の価値を評価してから

実施する。NGOは科学者の意見に同意しなかったが、レフリーである彼らの決定に従うべきである。政府も産業界もそのように理解している。たしかに、合意しなかった少数の人たちがいる。しかし、世界遺産委員会としては、NGOの皆さんのおかげで世界遺産の保護という点では大きく前進したと思っている。

Anja Light 話が堂々巡りになっているのではないか。科学的アプローチだけでは不足である。企業は利益を追求するが、地球益というものを考えなくてはならない。日々の消費者と、生産者との間に、意識の差があるのは仕方ないことではあるが、社会的且つ環境上の信条が大切である。利益だけで意志決定するのはやめてほしい。

松本 NGOの皆さんに、木を伐ることについてどのように考えるか、うかがってみたい。森林は再生する資源であり、我々はきちんと管理されていれば、化石燃料などよりもむしろ使っていくべき資源であり、地球益にかなうと思っている。

山浦 再生を念頭に置いた、森林を使った経済活動はあるべき。ただ、日本にも森林はあるのに、わざわざ海外へ出掛けて行って植林しているのは、海外依存に他ならない。特に東南アジアなどで植林することは、ネガティブな影響があるのではないか。また、森林利用計画については、市民の声も聞いて考えてほしい。

河辺 私どもはベトナムでアカシア・ユーカリを植林している。荒廃地を利用しており、また、事業を通じてチップ工場ができるなど、地域に貢献していると自負している。何が問題なのか。

Jennifer Krill ユーカリやアカシアの人工林は、森づくりとは言えないのではないか。実施地域における生物多様性は確保されていると言えるのか。HCVFの保護、気候問題のほか、原生林やオールドグロスがCO2固定という点においても重要である。

河辺 植林事業は現地のバックアップがないとできない。植林が行われているということは、現地の人々がそれを望み、バックアップしているということだ。しかし、今日は植林を議論する場ではないので、話をタスマニアに関する問題に戻したい。

川上 原生林について。日本製紙は、ウェブサイト上、或いはやりとりしたレターにおいて、ほとんどの場合、「保護価値の高い原生林」という言い方をしている。これは、タスマニアの法規制がかかっているところを指すのか、それとも独自に設定しているのか。AFS以外に貴社独自の措置はあるのか？

また、王子製紙は日本消費者連盟への返答において、「原生林」の混入がないことをトレーサビリティ・レポートで確認しているという言い方をしている。この解釈は日本製紙と同じか。私たちは「原生林全体」で考えてほしいのだが。

松本 保護価値の高い森林というのは、共通の定義があるようで、ない。ただし、豪州の森林保護政

策は、タスマニアの法規制を見ても、非常に高いレベルにあると判断している。それは PEFC によっても国際的に認められているものである。

Kim Creak RAN がタスマニアにおける伐採プロセスを実際にごらんになったことがあるかどうかは知らないが、人間が生活していくために、管理された天然林の利用というのは持続可能な方法なのである。長期間にわたる生物多様性の維持という点においては、自然を真似るというやり方がいちばん良い。生物多様性は、連邦レベルでも決められており、きちんと守られている。科学者たちが決めた基準が設定されている。そもそも科学者というのは利益では動かない人たちである。ポスターやプラカードで訴えるのではなく、科学的根拠に基づくべきではないか。とにかく申し上げたいのは、バランスが大事であるということ。日本では保護されている森林は全体面積の 10% 以下だが、タスマニア州では 47% である。企業は、民主的なプロセスによって決められた法律に従って管理されているものを購入していることを知るべきである。

河辺 当社においても「原生林」とは「タスマニア州で定義されている原生林」という意味である。HCVF は残すべきであるということは当社の調達方針でも定めていることである。それはオールドグロスだけではないはず。それでは、誰が、どうやって、どのエリアを保護価値が高いと決めるのか。それはタスマニア州の人々であり、タスマニア州では州政府が決めたところで伐採されたものだけが利用されている。

川上 貴社の HCVF とはタスマニア州において合法的に保護された森林ということか。ところで、日本製紙は 2004 年 4 月のレターにおいては、「保護価値の高い原生林」ではなく、「原生林」と「保護価値の高い森林」と述べているようだが。

松本 今、手元に（レターが）ないが、当社においては常に「保護価値の高い原生林」という言い方をしているはず。（参考：2004 年 4 月のレターでは、『当社は、原生林および保護価値の高い森林の破壊的な伐採は支持しませんし、そのような破壊的な伐採から得られる林産物は購入しません。』と言っている）

山浦 製紙原料として何がいいのか、今後もこういう議論を続けていくのは有益である。定義の問題だけでなく、たくさん問題がある。豪州政府がいなくても、日本の市民団体との意見交換の場を持つようにしてほしい。

Anja Light 私たちは、保護価値の高い森林がすでに保護されているとは考えていない。未保護の、ガンズ社によって伐採されている保護価値の高い森林が多く存在していると考えている。今日のミーティングでは、『保護価値の高い』の解釈が両者で異なることがわかった。今回の会合には良い成果があった。日本、豪州の市民がビデオを通じて理解を深めてもらえた。市民の目から見たら、憂慮すべき伐採が行われていることがわかってもらえたと思う。現地で森を守ろうとした市民に対して訴訟が行われているが、

彼らは市民として声をあげただけ。CSR を追求しようと言うなら、企業はそんなことをすべきではない。双方向の意見交流が大事。

河辺 今日集まって良かった。重要なのは、タスマニアにおいて HCVF が十分に守られているかどうか、ということ。HCVF を残すことは、ここにいる全員の共通認識だと思うが、どの森林の保護価値が高いかということは、我々と、RAN、日本消費者連盟の間で話しても決められない。やはり、タスマニアの人々によって決められるべきであって、タスマニアの HCVF について話をするなら、州政府の説明を受けてもらいたい。

松本 当社としても、タスマニアについて方向性を決めていくための判断を求められても、日本の製紙メーカーと NGO だけでは決められないと思っている。タスマニア州政府の方々に頻りに日本に来ていただくことはできないが、こういう場を繰り返していくことこそ最良であると思う。

Mark Addis 継続していくことは嬉しいことである。NGO が懸念する多くの問題は、タスマニア州政府が対応すべき問題である。製紙会社の問題ではないし、製紙会社に責任もない。また、それらは連邦政府の問題でもない。タスマニア州の政策、法律、規制の問題である。タスマニア州は森林の保護、再生に誇りを持っている。森林保護と林産業とがバランスを取っていくべきであり、州の取り組みは世界最良であると思っている。HCVF は科学をベースにして決められる。それは、境界線も、バッファゾーンについても同じである。また、生産を行う森林については、持続可能性とのバランスを取って決められなければならない。タスマニア州の森林施業は世界最高基準によって行われていると自負している。その基準とは、独立した機関によって決められたものである。森林の保護も利用も、法規制の下で行われている。すべてのステークホルダーのことを考え、フレームワークを作ったが、満足していない人たちもいる。バランスを取った、妥協の結果であるからだ。残念だが、今日出た話は、これまでにタスマニア州政府が対処してきたものばかりであり、何年にもわたって、議員や科学者たちが話し合ってきたことばかりである。既存の状態を変えるかどうか、これはタスマニア州政府が決めることであり、そのために関係者を含めたプロセスが存在する。継続して見直しを行い、必要に応じて変更する。現状には誇りを持っており、どこにも引けを取らない管理を行っていると考えている。これまでにやってきたことを理解してもらうために、これからも州政府は支援を行っていく。つまり、これからもタスマニア州政府は喜んで対話を継続する意思がある。なかなか希望通り頻りに日本に来ることはできないかもしれないが。

Jennifer Krill 今日はありがとうございました。対話の機会があれば、また来日したい。タスマニア州政府の言っていることのある部分は賛成できるが、賛同できない部分もある。例えば、タスマニアの問題はタスマニアで決めるべきというが、多くのチップが日本に来ている以上、日本での議論も必要である。タスマニアに影響を与えている決定は日本で行われているのですから。

山浦 基準の話だけでなく、訴訟やパルプ工場のこと話していきたい。今後も、このような話し合いの機会を持てるということなので、嬉しく思っている。タスマニア州政府の方にもぜひ来ていただきたい。

Bill Withers 連邦政府を代表して確認したい。アレック・マー氏は訴訟の件があるから来られないということだったが、それは何故なのか。

松本 つまり、訴訟はガンズ社が起こしたもので、タスマニア州政府とは関係ないので理由にならない、ということではないか。

Jennifer Krill おっしゃることは事実だが、オープンな対話が当初の目的であるのに、豪州やタスマニア州の政府が同席するこうした形での会合は訴訟の当事者にとっては脅威となるというも事実。豪州でのガンズ社による提訴で、アレック氏は発言の自由を奪われていることを理解していただきたい。

Annja Light 今日の議論の多くは本論から外れており、枝葉に終始していたように思う。生活を変えていくのは、社会の周辺から生まれるものであり、ある意味ではそれも必要なのかも知れないが。

林 今後に向けて、建設的なコラボレーションを検討してほしい。森林保護のために取られている施策には敬意を表する。ただ、大量消費を求める消費者にも問題があるのであり、彼らに働きかけていく必要がある。2010年に名古屋で予定されている生物多様性会議に向けてキャンペーンを行う。日本の消費者は誰もタスマニアの状況を考えていない。ビデオ放映を考えており、タスマニア州政府、製紙会社とも一緒にコラボレーションしてほしい。詳細は次回お話ししたい。

武内 (PEFC) オブザーバーの立場ながら、最後に発言させてほしい。PEFC、AFSについて、情報不足があるようだ。ウェブサイト誰でも閲覧できるが、相互承認の綿密な検討についてはレポートが掲載されている。PEFCとしては NGO からの貢献があったと認識している。ぜひ読んでほしい。

松本 予定していた以上の長時間にわたったが、これで今日は終わりにしたい。誰も森林を破壊しようと思っていない。タスマニア林業が良い方向へ向かっていくよう、今後も、対話を継続して行きたい。

以上